

氏名	もちづき ゆい 望月 由衣
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第921号
学位授与の日付	平成31年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	実験映像作家飯村隆彦の作品における見ることーフィルムとビデオを中心にー
審査委員	(主査)教授 並木誠士 教授 池側隆之 教授 伊藤 徹 准教授 平芳幸浩 准教授 三木順子

論文内容の要旨

本論文「実験映像作家飯村隆彦の作品における見ることーフィルムとビデオを中心にー」は、戦後日本を代表する実験映像作家のひとりである飯村隆彦(1937-)の作品を分析の対象とし、飯村作品における「フレーム」を考察することを通して、飯村作品で問題とされる「見ること」のあり方を明らかにすることを目指すものである。論文は、5章よりなる。以下、論文の構成にしたがって、内容を略述する。

「はじめに」では飯村の作品歴が概説される。

第1章「活動の概要と背景、先行研究」では、飯村の活動を俯瞰するとともに、その背景にある映像芸術の流れを概観し、そのうえで、先行研究として、飯村についてのこれまでの言説を紹介・分析する。

第2章「ビデオ作品《Camera,Monitor,Frame》(1976/1998)、《Observer/Observed》(1975/1998)、《Observer/Observed/Observer》(1976/1998)における、見ることと見られること」では、表記の作品の技法・表現を詳細に記述したうえで、これらの作品を鑑賞者の視線を考えるモデルとして位置づけている。

第3章「フィルム・パフォーマンス《公演された『ダダ 62』》(1963)、《スクリーン・プレイ》(1963)ー同時代の美術動向の関係からー」では、表記作品の技法・表現を分析したうえで、映像作家としての飯村にとって、「映像」と「映画」の位相を詳述し、飯村が、映画において「フレーム」を重要視していることを指摘したうえで、それを、投影する空間全体の問題として設定していることを示している。

第4章「フィルム・インスタレーション《プロジェクション・ピース》(1968-72)、《ひとつの線として見えるひとつのループ・フィルム》(1972)、《フィルム・インスタレーション》(1974)における光と影」では、飯村が「映画」を、たんに動画と捉えるのではなく、光を通して映されることで生じる光と影を重要な要素と考えていることが指摘される。

第5章「飯村隆彦における「フレーム」ーレーザー・ディスク作品《エアーズ・ロック》(1984年、カラー、40分、音楽リッチー・バイラーク、日野皓正、富樫雅彦、パイオニア/LDC配給)、

フィルム作品《間:竜安寺石庭の時/空間》(1989年 16ミリ、カラー、16分、音楽小杉武久)を中心に―では、飯村の後期作品であり、新しい作風を示す作品群を対象として、「知覚」と「映像」というキーワードを用いて考察する。具体的な視覚的イメージを撮影することに否定的であった飯村が、1980年代に入り「エアーズロック」や「竜安寺石庭」などを撮影していることを指摘したうえで、それが「抽象的に」撮影されており、対象が線やシルエットなどのあらかたの形としてパターン化されていると論じている。

「おわりに」において、申請者独自の視点として、飯村作品を「フレーム」で論じることを意味を再述する。

以上のように、本論文は、日本の実験映像の草分け的な存在である飯村の作品を詳細に分析し、さらに、フィルムの映写やビデオの録画再生機材を実際に用いたインスタレーション作品やパフォーマンス作品なども視野に入れて、飯村作品における、異なるメディア、複数の制作方法によって同時に展開する手法を明らかに浮かびあがらせている。

また、それぞれの作品のなかで、映像作家や美術作家、舞踏家など多様なジャンルの作家達との関係がどのようなかたちをとり、どのような効果を生み出しているかについて、資料を詳細に分析し、また、作家本人とのインタビューを重ねて明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

望月由衣「実験映像作家飯村隆彦における見ること―フィルムとビデオを中心に―」は、わが国の映像芸術史の初期を代表する作家飯村隆彦の作品を分析し、作家本人へのインタビューを踏まえてその芸術的・歴史的な位置づけを試みた論文である。本論文の意義は以下のようにまとめることができる。

第1点として、映像作家として国際的に活動しているにもかかわらず、これまで日本の戦後映像史において学術的对象として扱われることのなかった飯村隆彦について、その制作全体を俯瞰した考察をおこなっている点で、飯村に関する基礎的な研究となっていることがあげられる。これまで飯村隆彦の作品は「時代に迎合的である」と評されることがあった。その点について、申請者は、以下の二つの観点から批判し、独自の飯村論を展開している。それは、ひとつには、飯村作品に一貫して流れるテーマを浮き彫りにし、作家としての一貫した問題意識とその表現の特質を「見る」視点と「見られる」視点から明らかにしている点であり、もう一点は、映像芸術において先端的であったアメリカの実験映画などを積極的に踏まえたうえで独自の作品にしている点をあらためて評価するという点である。これが申請者の独自の視点であり、また、本論文の大きな意義である。アメリカの実験映画やビデオ・アートの紹介者という視点からも飯村作品を分析することで、たんなる作家研究ではなく、戦後日本とアメリカの実験映像の歴史の比較研究へと道を切り開いたことも大きな意義である。

第2点として、戦後日本の前衛アーティスト達との関わりを浮き彫りにし、当時のアーティスト間での協働的な作品制作のあり方についての研究への端緒となっていることがあげられる。協働した作品制作において、個と全体の仕事を見分けることは困難な作業であるが、飯村隆彦本人の自宅での調査とインタビューを重ね、これまで未検討であった資料等を丁寧に踏まえながら、実際の制作過程を詳細に分析している。

以上のように、本論文は、映像作家飯村隆彦の芸術的・歴史的意義をはじめて明確に論じた論文として、その独自性を高く評価することができる。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の 2 論文 (①②) として、すでに公表されている。

- ①「飯村隆彦のビデオ作品における「見る」ことと「見られる」こと」(意匠学会誌『デザイン理論』62号、2013年、pp.83-93)
- ②「飯村隆彦のフィルム・インスタレーション作品における光と影」(社会芸術学会『社藝堂』3号、2016年、pp.79-95)